

## 丹波敬三博士の欧米出張

薬学雑誌 271 号 804 頁 (1904) より

日本最古の医家丹波家につながるという蘭方医、元礼の三男に生まれ、東大薬学の第 1 回卒業生(1878)である丹波博士は、1887 ドイツ留学を終え、帝大教授に就任。柴田教授の後、長井、下山、丹羽博士らとともに草創期の薬学をリードした。博士は、1904 年 9 月モンゴリヤ号にて米国に出発する。／薬学雑誌 271 号 804 頁(1904)「新橋停車場は混雑を極め見送人は無慮六百人なり。重なる人は正親町伯爵(注、初代薬剤師会会長)、石黒男爵(軍医総監)、長井薬博(以下 23 人書いてあった)。正午十二時発車に横浜に同乗せしは下山、田原、丹羽(以下 21 人の名前)、其他選科及び模範薬局員等十数名なり」。

その後長井薬学会会頭宛に「米国通信」「欧州通信」を

頻繁に送り、薬誌各号に掲載されている。阿蘭陀の医師は転地療法、温泉など薬物を使わないため、薬剤師収入が少なく、結果として女性の薬剤師が増えてきたとか、普仏戦後ドイツの脅威を感じている仏蘭西では政府が人口減少につながる避妊を禁止したため以前見られた洗浄器が薬局から姿を消したとか。

旅順陥落、露國內乱、奉天の日軍全勝等の感想は伯林から。露国びいきだった独逸の新聞は最近変わってきたとある。日本海海戦の 16 日前、5 月 11 日出発、薬誌 (1905) 644 頁の長崎縣通信によると、バ艦隊同様、印度洋を経て 6 月 14 日独逸郵船ダルムスタット号にて長崎入港、大歓迎のあと翌日汽車にて帰京の途につく。ちなみに山陽本線開通が 1901 年。神戸に寄って東京着 20 日。薬誌翌月号の東京通信には 6 月 29 日上野精養軒での歓迎会の様子がある。

小林 力